



2022年4月14日放送

人類は麻薬とどのように関わってきたのか

日本薬史学会 副会長
日本薬科大学 客員教授 船山 信次

はじめに

本日は、人類が麻薬を見出してきた歴史やその医療への応用、そしてその規制の一端をお話して、人類が麻薬を求めてきた事実と麻薬といかに付き合ってきたかについて話題を提供したいと思います。なお、私は今日のこの話に関連した『〈麻薬〉のすべて』という本を講談社現代新書の一冊として出しているのので、より詳しく知りたい方には一読をお勧めします。

麻薬の定義

実は、麻薬の定義は難しいところがあります。麻薬とは本来は、麻酔性と習慣性のあるものとされていました。モルヒネやモルヒネから作られたヘロインなどは間違いなくこの範疇に入りますが、その後に出現したLSDには幻覚作用や習慣性はあるものの麻酔性はありません。しかし、現在、LSDは「麻薬及び向精神薬取締法」によって規制されている歴とした麻薬です。そして、わが国では大麻や覚醒剤は麻薬とは別に、それぞれ「大麻取締法」および「覚醒剤取締法」で規制されていますが、国によってはこれらの薬物も同一の法律で取り締まられているところがあります。なお、わが国でこれらが別の法律で取り締まられるようになった経緯については後に少し触れます。

以上から、私たちの意識としてはなんとなく私たちの精神作用、すなわち脳の働きに影響を与え、その習慣性などから社会生活に困った影響を与えるものを総合して麻薬と呼んでいると言えます。そこで、ここでは、大麻や覚醒剤も麻薬の仲間と看做して話を進めていくことにいたします。

麻薬の歴史

人間と麻薬との付き合いにはかなり長い歴史があると思って間違いありません。中でも、大麻やコカ、そして、モルヒネやヘロインの原料となる阿片といったものは大変に古い歴史を持っています。また、地域は限られますが、民俗薬としてのサボテンの仲間のペヨーテやテオナナカトルと称されるキノコなどには幻覚成分が含まれており、これらの使用も相当に古いと思われます。これらに対して、覚醒剤や LSD などは新しい麻薬と言えましょう。

しかし、いずれにせよ、これらは、人類との遭遇を経て、そしてその使用によって麻薬と称されるものになったのであり、人類との関係が無ければ、これらは単なる植物として、または化学物質として静かに存在し続けただけに過ぎません。人類がこれらの植物や化学物質を麻薬としたのです。

麻薬は人類との遭遇により生まれ、人類はその知恵ゆえにこれらを世界中に広め、また、より強力なものに発展させました。そして、その発展には戦争も大いに加担したことを知っています。例えば、アメリカの南北戦争が起きた 19 世紀の中頃には注射器が発明され、モルヒネと注射器との組み合わせによって、この戦争中にたくさんの兵士たちがモルヒネ中毒となりました。このような中毒は当時、兵隊病と言われていたことがあるそうです。時代が下って 20 世紀後半のベトナム戦争においては、モルヒネのアセチル化によって得られたヘロイン中毒がアメリカ兵の間に広まりました。

戦争と麻薬との関係はわが国にも見られます。第二次世界大戦後、日本を占領したアメリカ軍の GHQ は、わが国でそれまでは普通に栽培され使われていた大麻を麻薬と指定し、その栽培や使用を禁止しました。わが国には大麻吸引の習慣がありませんでしたが、GHQ の兵隊たちがその吸引の習慣をもたらしたのです。わが国では大麻の繊維を下駄の鼻緒や織物、漁網、ロープなどに多用していたこともあって大変に困り、GHQ との再三の交渉の結果、大麻を麻薬から外し、新たに「大麻取締法」が制定され、免許制によって大麻が再び栽培されるようになりました。

また、戦時中には、日本軍が覚醒剤を、昼夜を問わず働かせたり、歩哨に就く兵隊の眠気覚しなどに使ったりしましたが、それが戦後、軍から大量に民間に放出されたために覚醒剤中毒に陥る人が多発しました。当初、覚醒剤はモルヒネなどの麻薬ほどの害はないと考えられたことから、戦後に麻薬とは別に「覚醒剤取締法」が制定されましたが、覚醒剤が大きな問題を孕んでいたのはご存知の通りです。

麻薬各論

それぞれの麻薬については、詳しく書かれた本を参照していただきたいと思いますが、いくつかの麻薬について少々追加しておきたいこととお話しておきましょう。

モルヒネをアセチル化して得られたヘロインは 19 世紀の末にドイツのバイエル社から鎮

咳作用を目的として発売されましたが、その名前はヒーローやヒロインなどと語源を等しくします。それだけ期待された鎮咳薬でした。しかし、残念ながら今のところ、とても困った存在となっています。一方、モルヒネは癌疾患における痛みに変に有効な鎮痛作用を示すのですが、わが国ではこの目的での使用が先進国中でダントツに少ないことが気にかかります。薬剤師は麻薬管理者になる立場でもあり、この面で私たちにはさらなる期待と活躍が望まれます。

コカインは南米のコカノキの葉から採取されるアルカロイドですが、地元でコカチューイングの方法でコカ葉を摂取したり、コカ茶として服用したりしている分にはあまり問題なく、コカ茶は南米の高地にある都市においては高山病に良く奏効するとして重宝もされてきました。しかし、コカの葉からコカインが純粹に取り出され、コカインの大量摂取がなされるようになってから大きな問題となっています。なお、コカインには局所麻酔作用がありますが、コカインの化学構造を参考としてキシロカインやプロカイン塩酸塩などの局所麻酔剤が開発されました。例えば、もし、歯科治療によく使われるキシロカインの様な局所麻酔剤がなかったらと考えるとその重要性は理解していただけたらと思います。

LSD が麻薬に指定されたのは 1970 年のことです。LSD には麻酔作用はないものの強い幻覚作用があることから、その規制前には、芸術家のいわゆるサイケデリック感覚にもてはやされた時代もありました。

覚醒剤はわが国生まれの麻薬です。麻黄という葛根湯などの漢方薬に配合される生薬の主成分として単離されたエフェドリンの化学構造研究中に調製されました。覚醒剤は精神を激しく昂揚させ、眠気や疲れを一時的に忘れさせますが、この一時的な昂揚が去った後の虚脱感がひどいためにこの薬物をまた使いたいという誘惑にあらがうことが困難です。いわば、薬物の方が主人となってヒトをコントロールしまう怖い存在なのです。

マジックマッシュルームと称されるキノコの仲間は、規制される前にはその販売がインターネットで行われたこともありました。このきのこ類には向精神作用のあるアルカロイドが含まれ、現在では「麻薬及び向精神薬取締法」で規制されています。一方、ペヨーテと称されるサボテン類がありますが、その幻覚主成分のメスカリンには強い吐き気などの作用もあってあまり人気のある麻薬ではないとも言われています。

おわりに

私は「薬毒同源」とよく言っているのですが、薬と言われるものも使い方を誤ってしまえば、毒と言われる存在になり、その逆も真です。これらの薬や毒を人類のために役立たせるためにこれらを専門的に扱う立場が絶対に必要でその中核が薬剤師です。この意味でも薬剤師という職業はとても重要で尊いものと思います。

人類が見出したこれらの麻薬はそれぞれの文化が成熟するに従い、医療に用いられたり

規制されたりすることになりました。そして、その悪い方の究極の発展型のひとつが「危険ドラッグ」ということになろうかと思えます。実は、その出発点は、ニセ大麻や合法大麻と呼ばれた大麻の代わりになるものを作り出すことでした。この事実を忘れてはなりません。なお、大麻が規制されている日本は遅れているという方もおられる様ですが、私は、逆に、日本は大麻の蔓延を未然に防いでいる進んだ国であると思っています。大麻濫用の規制に失敗し、その蔓延に目をつぶらざるを得なくなった様な国の後追いをしてはなりません。私は大麻成分、例えば、THC にその副作用となる幻覚作用を凌駕するような望ましい作用が見つかれば、それを医療に用いることに賛成です。しかし、当然ながら、その場合でも、これを理由に大麻濫用を解禁することはあり得ないと思います。

薬剤師は、麻薬についての知識とともに確固とした考えも、個々に持ちあわせていかなければならないと思うことを述べて今日のお話を終えたいと思います。